

## 中国に於ける「祖霊の構造」モデルをめぐって

江嶋，修作  
広島修道大学

<https://doi.org/10.15017/2231525>

---

出版情報：九州人類学会報. 2, pp.52-54, 1974-10-01. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：



# 中国に於ける「祖霊の構造」モデル をめぐって

広島修道大学 江 嶋 修 作

## 序

本報告は、伝統的中国社会に於ける祖先崇拜の一局面を扱う。崇拜の対象となる「祖霊の構造」をめぐり問題である。考察の為の資料は、中国大陸の一部や台湾などでの人類学的諸調査報告を中心とする。それに、戦前・戦中の、中国大陸での社会学的諸調査報告や、若干の文献研究などを加える。

## 1. 問 題

ここでの問題点は、以下の通りである。「中国祖先崇拜の対象である祖霊は、いくらかの異った性格と特徴を持つ、ある種の祖霊群に構造化出来る。この構造化された各祖霊群の、親族構造の中で働く機能を考えることを通して、祖先崇拜を構成する基本的枠組みが類推し得る。これは、2つの異った枠組みとして取り出される。」

## 2. 分析視点

ここでの分析視点は、以下の2点である。

- (1) 「祖先崇拜」と「親族構造」との関係は、「祖先祭祀」という儀礼行為のレベルで象徴的に表現される。
- (2) 祖先祭祀の諸儀礼を、「祖霊の神化のプロセス」における「通過儀礼」と考える。

## 3. 「祖霊の構造」モデル

<図表>に、モデルを示す。これは、神化のプロセスを通して取り出した「祖霊の構造」である。

<図表> 「祖霊の構造」モデル

神化のプロセス	(死)	→	→	↔	↔
通過儀礼	A	B	B'	C	D
祖霊の構造	死 霊	祖 霊 I	祖 霊 I'	祖 霊 II	祖 霊 III

人が死に、死霊となり、やがて種々の通過儀礼を経て、いくつかの祖霊群に構造化されていく姿を示す。通過儀礼の箇所は、ある祖霊群から次の祖霊群へと移項する境界を表わす。便宜的に、順次、A、B、B'、C、Dの儀礼とする。

#### 4. モデルの説明

このモデルを、各段階の祖霊群の特徴及び性格を取り出すことで、説明する。4つの項目を通して考える。

##### (1) 通過儀礼を通して

Aは、臨終に始まり、告別、埋葬などの諸要素を含む葬儀と、その後の服喪などの若干の儀礼である。生者の世界からの離脱と死者の国への旅立ちを象徴化する。Bは、位牌に魂を入れる儀式や、位牌(代用品)を家の中の祖先の祭壇に安置する儀式などで代表される。祖霊集団<I>の正規のメンバーシップを与えられることを象徴化する。B'は、位牌の分離や複製の儀式で代表される。Cは、位牌などを焼いたり埋めたりする儀式と、新たな位牌を祠堂(家の外にある)に安置する儀式である。<祖霊I>から、全然別の祖霊集団<II>への移行を象徴化する。Dは、<祖霊II>から、ある祖霊が取り出され、その位牌の為の或いはその位牌を中心とした祠堂が作られ、祭られる儀式である。

##### (2) 儀礼的象徴を通して

<死霊段階>は、死者の遺骸或いは墓地である。<祖霊I>及び<I'>は、位牌或いはその代用品である。例えば、<I>の位牌は、個別的で個性を持つ。<I'>では、主として個性的だが、「祖先一般」を示す非個性的位牌が現われる。<I>と<I'>の位牌の特徴は、家の中の祭壇に安置されることにある。<II>の段階の位牌は、原則として、非個性的である。<III>は、個性を持った位牌である。<II>と<III>の位牌の特徴は、家庭内の祭壇を離れて、祠堂などに安置されることにある。

##### (3) 祭祀集団を通して

祖霊を祭る側の集団を問題にする。<I>、<I'>、<II>、<III>は、各々、household - family, extended - family, segment, lineageの集団概念に対応する。一方、<死霊>段階は、kinshipに対応する。各祖霊段階の祭祀集団は、祖霊の神化のプロセスという時間的経過に比例して、空間的拡がりを示す。

##### (4) 親族関係を通して

喪服等級による親族分類名称によって考える。<I>、<I'>、<II>、<III>は、各々、「父系の期親以上」、「父系の大功～總麻親」、「父系の無服親」、「同宗」に対応する。直系尊属の世代で考えると、各々、「3世代」、「3～4世代」、「5世代以上」、「6世代以上のある世代」となる。

## 5. モデルの解釈

モデルの解釈は、祭祀儀礼の機能を考えることを通して、試みる。この場合、次の仮説的前提に立つ。「①、祭祀儀礼を、通過儀礼として考える。②、通過儀礼に、2つの側面を考える。個人心理学的側面と社会学的側面である。」

まず、心理学的側面、つまり「個人の危機の克服」の観点で考える。生者と死者の各々の側で、危機が克服される。死者の側面では、神化のプロセスからはずれ、地下の国をさまよう如き危機を克服するように、儀礼が「意味づけ」られる。生者の側では、自己の係わり合った人の死により、悲しみ、虚脱感に陥り、或いは死霊の害に促されるなどの危機を克服する「意味づけ」になる。この種の機能は、〈祖霊Ⅰ〉で中心的に、〈Ⅰ'〉で漸減する。〈Ⅱ〉以後では、生者と死者の双方にとって、もはや、危機の克服を必要としない。生者にとっては、危機を感じるだけの、死者との生前の関係或いは記憶がないという意味で、死者(祖霊)にとっては、完全に祖霊社会の成員となり、神的存在に近づいたという意味に於て、必要ない。

次に、社会学的側面、つまり「集団統合」機能に触れる。次の2点を指摘しておく。①、統合機能が、神化のプロセスに対応して、より中心的になっていく。②、〈Ⅰ'〉までは、亡くなった集団メンバーの役割交代によるなどの、集団の再統合として機能するが、〈Ⅱ〉以後は、全く一般的な集団統合機能に転化していく。

この2つの側面での機能は、現実には、重なり合っている。ここでは、操作的に分けて考えた。ただ、個人的危機の克服機能と集団の統合機能という2つの異った側面での機能が、祖先祭祀儀礼という、同一の行為レベルで混在しているが故に、現実の中国祖先崇拜の諸現象を、一見、複雑にしているとも考えられる。

## 6. 結語：祖先崇拜の2つの枠組み

先の、機能の2つの側面から、モデル構成の、引いては、中国祖先崇拜の、2つの枠組みが類堆される。「個別的祖先崇拜」と「一般的祖先崇拜」と名付けておく。

「個別的祖先崇拜」の枠組みは、個人的危機の克服機能に対応する。生者と死者が、何らかの親族関係にあること、互いにそのパーソナリティを認知し合っていること、これが条件である。つまり、「個人と個人との親族関係」を基礎とする枠組みである。

「一般的祖先崇拜」の枠組みは、集団統合機能に対応する。生者と死者との、個人的認知を必要としない。これは、「祖霊集団と祭祀集団との集団的關係」を基礎とする枠組みである。

以上、祖霊の神化のプロセスを通して、「祖霊の構造」モデルを取り出し、このモデルを説明し、解釈することで、祖先崇拜の基本的枠組みを類堆してきた。

(この報告は、下記の紀要に研究論文として掲載している。御覧戴きたい。中国に於ける「祖霊の構造」モデルをめぐる一研究、『広島修大論集-人文編-』第14巻2号。)